別紙（事後評価書）

令和４年度文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）

通し番号	7	事　業　区　分　：　劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業 助成対象団体名：　公益財団法人可児市文化芸術振興財団 施　　設　　名　：　可児市文化創造センター

助成対象活動に関する評価

（妥当性）

当該劇場・音楽堂等のミッションは、「『芸術の殿堂』ではなく、人々の思い出の詰まった『人間の家』へ」と明示され、「文化芸術で『生きる活力』と『コミュニティ』を創出し、『社会の健全化』を目指す」としており、全国の公立劇場の先駆けとなる社会包摂型による劇場経営を進めている。

ミッションを実現するために、質の高い文化芸術の鑑賞機会を提供する「第１の矢 感動と希望を生み出す最高水準の舞台芸術」、地域のコミュニティを形成する「第２の矢 人と人とをつなげていく市民総活躍社会の実現」、地域の社会的課題解決をする「第３の矢 生き辛さを解消する文化芸術によるセーフティーネット」の３つのビジョンを掲げて、事業計画「ala まち元気プロジェクト」を推進している。アウトカムは、ビジョンとほぼ同じで、整合性が認められる。文化芸術を通じて地域の社会的な課題解決への取組がなされており、計画に必要な構成要素が有機的に連関し、当初の予定どおり、事業計画が推進されたと認められる。

市民に質の高い公演の鑑賞機会の提供、市民の文化活動の発表の場となる市民参加型の大型公演の開催、子供・高齢者・障害者・外国人などの社会的課題解決のための事業を展開するなど、助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が認められる。

令和４年度において、当該劇場・音楽堂等開場 20 周年と可児市政施行 40 周年を記念して実施したプロデュース公演は、新作書下ろしへの挑戦や可児・東京公演が完売となるなど、市民、キャスト、スタッフが交流しながら最高水準の舞台をつくりあげた。他に、アウトリーチ事業での初の落語会、一躍脚光を浴びた音楽家プロデュースによるコンサートなど、すべての事業について、ミッション・ビジョンに整合性が認められる。

（有効性）

「３本の矢」のアウトカムとして、それぞれ「感動と希望を生み出す豊かで実の高い鑑賞体験の提供」「人と人をつなげていく、市民総活躍社会の実現」「現代社会における生き辛さを解消する文化芸術によるセーフティーネットの実現」が設定され、明確である。

「第１の矢」に該当する芸術創造発信事業では、過去の優れた戯曲に焦点を当て、再評価する「ala Collection シリーズ」の自主制作による演劇公演、地域拠点契約を締結している劇団文学座と新日本フィルハーモニー交響楽団の公演、地元在住のミュージシャン・森山威男による「ジャズナイト」など、多彩な公演を実施した。また、「英国を代表する劇場との劇場提携」による劇場間共同制作公演も実施し、質の高い舞台芸術の鑑賞機会を提供した。新型コロナウイルス感染症拡大による入場制限（50%）などで入場者数が目標を下回った年もあったものの、全体としては高い入場率を維持している。

「第２の矢」に該当する市民総活躍社会の実現では、市民ダンサー49 人、市民オーケストラ 65 人が参加した大型市民参加企画「オーケストラで踊ろう！」をはじめ、地域拠点契約を締結した団体や専門家を活用したワークショップや講座、アウトリーチなどで、市民の芸術活動の活性化や参加者同士の新しいコミュニティの形成を生み出し、参加者のア

ンケートによると「居場所づくり、新しい仲間づくり等」になっていると93.1%の回答を得ており、地域の社会的課題解決に寄与している。

「第３の矢」に該当する文化芸術によるセーフティーネットの構築では、平成29年12月時点での外国籍居住率が約６％となっている当該市の社会的な課題解決に向けて「多文化共生プロジェクト」を実施した。公演に参加する外国人と日本人が多様な文化を共に尊重し合う機運が醸成され、共生社会の構築につながっている。外国人の参加者同士をつなげる役割を担い、助言・アドバイスができる外国人参加者が現れるなど、多文化共生の実現に寄与している。

社会的なつながりが持てない乳幼児を抱えた母親向けワークショップ、高齢者の孤立化防止と健康維持のためのワークショップで地域の社会的な課題解決に努めていると評価できる。

令和２年２月末に発生した新型コロナウイルス感染症の拡大により、令和２年度は12事業、令和３年度は９事業が中止となった。入場制限により入場者数が目標に達していない事業もあったが、オンラインを活用した事業の展開によって一定の成果が上げられている。令和４年度については、全32事業の内、国際交流等の３事業は、新型コロナウイルス感染症の影響により中止になったものの、12事業が目標値を達成した。特にala collectionシリーズ、まちが元気になる処方箋などは、当初の目標値をはるかに超えた。他11事業についても平均80%強を達成した。市民とのつながりや数値には現れにくい社会関係資本(つながり資源)を基調とした事業展開は、顕著な成果をもたらした。

以上のことから目標をおおむね達成し、アウトカムの発現が認められる。

（効率性）

事業はほぼ計画どおり実施されており、事業期間は適切であったと認められる。

また、事業費については、要望時の予算額と報告時の実績額とを比較すると、一部の費目に増減があったものの、ほぼ計画どおり執行されており、適切であったと認められる。

（創造性）

過去の優れた戯曲に焦点を当て、再評価する「ala Collectionシリーズ」の『紙屋悦子の青春』は、「『人の心』に焦点を当てる繊細で緻密」な演出に定評のある演出家の藤井ごうを起用し好評を得た。確かな演技力で注目を集めている劇団文学座の若手女優と劇団文化座の実績を有する中堅俳優が好演し、令和２年度第27回読売演劇大賞優秀女優賞を受賞した女優や演劇界で活躍する俳優をキャスティングしたことが功を奏し「地域から全国へ質の高い舞台芸術の創造発信」をした当該事業は、独創性、先導性に優れていると認められる。

日英国際交流事業「To See You, At Last プロジェクト」は、日英両国の地域劇場がそれぞれ創作した作品を日本で一つの作品にまとめ、言語の異なる国々との海外共同制作に一石を投じた。両劇場による共同創作や演劇を通した日英の若者による国際交流、社会課題の解決に向けての問題提起につながっていることから、独創性、新規性、先導性が認められる。

「オーケストラで踊ろう！」では、振付家・ダンサーとして活躍している近藤良平が振付・演出を担当し、小学生から高齢者までの市民ダンサー、市民オーケストラが共演する新作の公演は好評を得た。２か月半に及ぶ稽古を通し、世代を超えた交流によるコミュニティの創造や地域の活性化が実現し、市民の文化芸術活動の拡大につながったことから先

導性が認められる。

「多文化共生プロジェクト」は、名古屋を拠点に活動する演出家とステークホルダー（事業に協力する可児市在住の市民、外国人）との連携を図って創作した多文化共生を目的とした公演として、外国人の居場所づくり、偏見や差別の解消、若い人の悩みの解決に向けての問題提起へつながっていることに、独創性、先導性が認められる。

「ココロとカラダワークショップ」では、乳幼児を抱える親、高齢者を対象に、ダンスと演劇的な手法を盛り込んだワークショップを行い、孤立防止、健康維持、参加者同士のコミュニティづくりに貢献し、優れた取組として先導性が認められる。

『紙屋悦子の青春』における演技で主演女優の平体まひろが、令和３年度第76回文化庁芸術祭賞新人賞(関東参加公演の部)を受賞した。

令和４年度については、ala collection シリーズ第 13 弾として新作書下ろしの上演に初めて挑戦し、著名な女優や多方面で活躍する演出家を招へいして質の高い作品に仕上げた。元館長でシニアアドバイザーの卓越したプロデュース力が認められた。

アウトリーチ事業では、中学生を対象に初の落語会が開催され、落語を生で見たことがない生徒に、落語の歴史、手ぬぐいや扇子の使い方、上下のきり方を丁寧に説明すると共に、教員と落語家との掛け合い落語で生徒を楽しませる工夫が施されていた。

現在、躍進中の音楽家プロデュースによる演奏会は、溌剌とした演奏を披露し、集中度の高い演奏を繰り広げ秀逸であった。

12 回を数える朗読プロデュース公演は、手紙に込められた想いを強く、質素に表現し、人と人とのつながりの大切さと、生きていく希望を生み出す効果的な演出が秀逸であった。

以上のことから、事業内容が、独創性、新規性、先導性等に優れており、事業の実施によって、当該劇場・音楽堂等の国内外での評価の向上につながったと認められる。

（持続性）

組織面では、職員の人材養成に力を入れており、毎月２回の館長ゼミを開催して、アートマネジメントのノウハウの共有などの内部研修、文化庁新進芸術家海外研修制度による海外での研修、国内の文化施設や文化芸術専門機関への派遣などで職員の能力向上を図って優秀な人材を確保している。また、英国リーズ・プレイハウスと締結した「グローカル提携」をもとに人事交流を行い、世界水準の舞台創作、社会包摂型事業の連携を図っている。相互のノウハウを共有することで事業の質の向上、人材養成に役立てる計画を進めている。

財政面では、設置自治体との良好な関係づくりから潤沢な指定管理料をはじめ、公的補助金や助成金等を獲得して安定した財政基盤を確保している。また、市内企業等から「私のあしながおじさんプロジェクト」「私のあしながおじさんプロジェクト for family」の支援事業の拡充のために寄付の増額を図るなど、外部資金の獲得に向けた取組も行っている。多元的な外部資金調達に努めていることが認められた。

これまで劇場総監督として事業をプロデュースし、他に類を見ない実績を上げてきた前館長が令和３年３月に退任しシニアアドバイザーに就任した。当該劇場・音楽堂等にとって大きな転換期を迎えている。前館長の元で養成された劇場職員は、その重責を担うと共に、引き続き社会包摂型劇場経営を伸張していく方向性を示している。

令和４年度は、「職員自主ゼミ」を新たに立上げ、全ての職員が理論と実践の課題やギャップを共通言語化し、業務の検証・改善案など、経営感覚と現場理論をバランスよく身

につけることに努めた。また、コロナ禍による「つながり」の機能不全を指摘し、社会関係資本を回復する必要性に言及した。市民のメンタルヘルス維持とレジリエンス(回復力)獲得を目指し、当該劇場・音楽堂等がその「プラットフォーム」となることを明言したことについて高く評価する。

以上のことから、人材養成に力点を置き、国際交流も図りながら事業を展開していることが認められ組織活動が持続的に発展し、今後もアウトカムの発現が持続的に定着することが期待される。

（総　評）

人口約 10 万人の基礎自治体でありながら、年間 30 万人余の来館者数を維持し、我が国の公立劇場の中で、いち早く社会包摂型劇場として特色ある劇場経営を行ったことは特筆に値する。「劇場、音楽堂等の活性化による法律」や「劇場・音楽堂等の事業の活性化のための取組に関する指針」の意図を十二分に踏まえた模範的な劇場として確固たる基盤を築いた。

地域拠点契約による事業の実施や、社会包摂事業を中心とした地域コミュニティの活性化事業は、可児市の地域社会に大きな刺激を与えている。生き辛さを感じている人々への惜しみない支援と実演芸術の水準向上の両輪を目指す劇場は、極めて独創的で、劇場の強みや特色を十二分に生かしている。

また、表方スタッフとして活躍しているボランティア組織alaクルーズや公演サポーターの後方支援など、劇場を支える市民の存在と功績は大きい。前館長の経営理念を引き継ぎ、今後も、質の高い事業の創造と発信、鑑賞機会の提供、住民の文化活動の参加機会の提供、社会的課題の解決、国際的なネットワークの構築などの実績を踏まえつつ、次代を担う劇場職員が一丸となって、我が国の公立劇場の先導役として、社会包摂型劇場の存在意義をより一層高めていくことに期待する。

また、コロナ禍で中止を余儀なくされた国際交流を再開し、我が国の国際プレゼンスを高めると共に、今後も当該劇場・音楽堂等の存在意義を国内外に発信し続けることに期待する。